

〔「琳派と風俗画」展によせて〕

樵夫蒔絵の意匠構成

光悦蒔絵は本阿弥光悦の指導のもとに制作されたと伝えられる漆工作品の通称です。独自の様式を示す漆工作品として高く評価され、多くの作品が光悦蒔絵として国宝・重要文化財に指定されています。当館にも「沃懸地青貝金貝蒔絵群鹿文笛筒」(図1・以下、笛筒)が所蔵されています。光悦蒔絵の特色には、古典文学に取材する意匠、斬新な器形と意匠構成、多様な材料の使用などが挙げられます。光悦が漆工作品の制作に関わったことは、遺された光悦書状によって確認できますが、現存する光悦蒔絵には光悦作の明確な根拠がある基準作品はなく、作品相互においても、同一工房の作品と判断できる程の共通性は認められません。芸術性の評価は別として、光悦作という伝承には疑問が残ります。従って光悦蒔絵は、光悦の在世時に京で創始された一群の蒔絵作品として研究が進められています。本稿では笛筒と同様に光悦蒔絵を代表する「樵夫蒔絵硯箱」(MOA美術館蔵・図2・以下、樵夫蒔絵)の意匠構成や主題、制作者について考えてみたいと思います。

樵夫蒔絵は蓋の中央部を高く盛り上げた方形の箱で、身の内側に硯と水滴が嵌め込まれています。



図1

蓋表には粗朶を背負う樵夫の姿が螺鈿と鉛板によって、足下には土坡が金の平蒔絵で表されます。蓋裏及び身と身の裏側にかけても土坡は続き、春の菜であるワラビとタンポポが螺鈿と鉛板で表現されています。春の山の景観に樵夫を表すことから、謡曲「志賀」に取材した作品とされています。すなわち、樵夫は大友黒主であるというものです。

樵夫蒔絵の主題を改めて考える上で手がかりとなるのが、『光悦派三名家集』(審美書院、1915年)に載る「樵夫象嵌蒔絵硯箱」(図3)です。ここでは、光悦ではなく光琳作として掲載されており、当時の所蔵は曾和嘉一郎氏となっています。両者を比べてみると、樵夫の足下の土坡が右手に続いている点や、身に嵌められた水滴の形状に違いが認められますが、樵夫自体は同じであり、同作品と考えられます。

右手に続く土坡の表現に着目すると、樵夫蒔絵に表された内容には別の解釈が想定されます。すなわち、光琳作とされる作品を見ると、山を降りているのではなく、粗朶を背負いながら丘陵地を逍遙しているように見えます。蓋と身を横に置くと土坡が連続し、ワラビ、タンポポなどの春の菜が表されることから、粗朶を背負った樵夫が春の菜を探し求めている姿が現されていると考えられます。この作品は「薪樵」「菜摘み」の二つの動作を示していることとなります。



図2(身)



図2(蓋裏)



図2(蓋表)



図3(身)



図3(蓋表)

ここで想起されるのが、光悦と法華経信仰との関わりです。当時、京の豪商達は法華経信仰によって社会的に結ばれていました。法華宗の寺院は様々な問題の解決を仲介し、金融においても重要な役割を果たしていました。光悦自身、法華経の熱烈な信者であり、菩提寺、本法寺には題箋の「法華経」の文字に自身の書を螺鈿で表した経箱を奉納し、元和五年(1619)には、日蓮の重要な著作である「立正安国論」と「始聞仏乗義」を書写し、妙蓮寺に納めています。

『法華経』を講義する法会に「法華八講」がありますが、その中で「提婆品」を供養する際に行われたのが「薪の行道」です。ここでは行基作とされる「法華経をわが得しこと」は薪こり菜摘み水くみ仕へてぞ得し」との行道歌が詠われます。釈迦の前世、阿私仙人(提婆達多)に従って、薪を取り、水をくみ、菜を摘んで法華経を得た、という内容に基づくものです。樵夫蒔絵はまさにこの歌を表したものであり、「水くみ」は硯箱の中の硯と水滴が象徴しているのです。行道歌を歌う提婆達多の姿は、藤田美術館に所蔵される「仏功德蒔絵経箱」(平安時代)にも表現されています。

樵夫蒔絵には、全体を通して一つの主題が表現されていることが分かりました。図様下絵の作者は、ワラビの表現や薪、樵夫の頭部のしっかりしたボリュームを組み合わせさせて動きを含ませる表現、やや全体を見下ろす俯瞰的な視点などに特色が認められます。これらの特色は俵屋宗達作品と伝えられている養源院東側の杉戸絵、「唐

獅子図」(図4)に共通し、代表作「風神雷神図屏風」にも通じるものです。笛筒の下絵作者が俵屋宗達である可能性を『大和文華』126号(2014年)で指摘しましたが、樵夫蒔絵も同様に、俵屋宗達の下絵である可能性が高いと言えます。樵夫蒔絵と笛筒は、螺鈿、鉛など多様な素材を大胆に使い、細部は金泥の付立て描で丁寧に仕上げるといった技法の共通点だけでなく、図様全体を統一の取れた主題のもとに構成されている点においても共通しています。特に、たくましい量感表現とダイナミックな動勢において樵夫蒔絵は、養源院杉戸絵から「風神雷神図屏風」にいたる後期の作品と関係の深い作品と言えるでしょう。(中部義隆)

※図2の蓋表は『琳派4人物』(紫紅社、1991年)、身と蓋裏は『大琳派展 継承と変奏』(読売新聞社、2008年)、図3は『光悦派三名家集』(審美書院、1915年)、図4は『琳派 京を彩る』(京都国立博物館、2015年)より複写いたしました。



図4